特別支援教育の扉 №１９７　　令和８年８月27日発行

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター　加賀谷　勝

「全国に保護者支援を発信」

前号で予告した通り、『教職研修９月号』に掲載された私の拙稿を紹介します。



「保護者の育てづらさに寄り添う」
～理解は偶然に起こり、誤解は必然に起こる～

就学相談や５歳児健診、心理検査の報告等で保護者と関わった経験を基に、わが子に「育てづらさ」を感じている保護者の心情や寄り添った支援を紹介します。

「この人なら信じてもいい」

「子どもとスキンシップがとれない」「子どもをかわいいと思えない」「厳しく育てられた親と同じことをしている自分が嫌」「学校からの電話が怖くて、いつも周りの人から責められているようで孤独だった」「このままだと子どもに手をあげてしまう」など、「育てづらさ」を感じている保護者の苦悩の言葉です。

保護者はわが子の特性に気づいている場合が多いです。しかし、受け入れたくない、心配はないと思いたいのです。人は自分が恐れていることを認めたくないという感情が働きます。両親が互いを信頼している、身近に相談できる人がいると、子どもの特性を受容しやすくなります。保護者が「この人なら信じてもいい」と思える存在が学校には必要です。

「念のために」

子どもの特性を伝える場合は、伝える必要性があるかどうかを校内で共通理解を図ったうえで面談を計画します。面談では、最初に子どものがんばっている様子が分かるように、写真や製作物を見せながら成長を喜ぶとともに、家庭での様子を尋ねます。次に子どもの気になる様子と学校の取組を記載した「個別の指導計画」を提示して、期間を設けて評価・改善を行い、変容が見られないときは関係機関と連携することを提案します。

関係機関につなぐ場合は、困っているのは子どもであることを前提に、より有効な支援を行うために相談したいことを提案します。その際「念のために」の一言を忘れないようにします。保護者の同意を得て、関係機関に資料を送ったり、同行して学校での様子を伝えたりします。保護者から「もう少し様子を見たい」という申し出があれば無理に勧めません。しかし、子どもの様子を伝えることは、また同じことを言われたときの特性受容につながります。

「理解は偶然に、誤解は必然に」

「理解は偶然に起こり、誤解は必然に起こる」と言われるように、保護者と同じ経験を積んでいないので、100%理解し合うことはむずかしいです。互いの立場の違いを理解し、話をじっくり聴くことが寄り添う支援のスタートです。がんばりをねぎらう言葉をかける、主語と数字をはっきり伝える、情報を提供するが結論は急がない、そして、保護者が答えを見つける支援を心がけましょう。

編集担当者からは、「保護者に寄り添うヒントを多くの読者の先生方に得ていただきたい」「学校には信じてもいい存在の人が必要である」「子どもの成長を一緒に喜ぶことが支援の入り口となる」などの感想をもらいました。まもなく就学時健康診断がスタートします。適正就学に向けて、保護者及び本人が答えを見つける情報提供と寄り添った支援を心がけます。



とれたて直送便





【優しい目・大きな耳・小さな口】

「優しい目（まなざし）」：子どものできているところやよいところに目を向ける。
「大きな耳」：子どもの話に耳を傾けて共感的に聴く。（口は一つ、耳は二つ）
「小さな口」：目標を絞り、子どもへの口出しを少なくしてほめる回数を増やす。
優しい目、大きな耳、小さな口を実践することで、子どもが変わることを実感しましょう。